

【作 品】

年表「現代ファッションの100年」の構成と内容

The Graphic Table of History, "100 Years of Modern Fashion"

塚田 耕一 TSUKADA, Koichi
鈴木 桜子 SUZUKI, Sakurako

I

本年表は、過去に発表したグラフィック年表「現代欧米デザインの100年」(光村図書出版、1996)、「日本デザインの100年」(光村図書出版、1997)とともに年表三部作を成すものである。

過去に起こった出来事を、時系列的に編年体として列挙しても、ほんとうの意味での年表には成り得ない。そこでは、ある事象とある事象との間の〈関係性〉が捨象されてしまうからである。また、時間的なズレや、空間的(地域的)な隔たりをもって現れた同時代的現象の同質性を理解することができないからである。時間の推移とともにリニア(直線的)に歴史を刻み得るのは、科学技術の分野だけである。そこでは進歩が最大の命題であり、逆行、遡行、回帰などの現象は起こりようがない。

本年表は、厳密には「現代ファッション・デザインの100年」と称すべきものである。しかし、ただ単にファッション史とデザイン史を同一紙面上に並列したものではない。ファッション史を理解するためには、デザイン史の理解が不可欠であるとの前提から両者の〈関係性〉が一目で分かるように作成されている。

一般的に、どのような書物であろうと、歴史の〈通時性〉〈共時性〉に加えて〈関係性〉を、同時に読者に伝えることはできない。

年表は、とくにグラフィック年表は、この錯綜する事象を総合的に図示することが可能である。読者は全体像を把握しながら細部を確認することができる。

本年表は、「年表」のもつこの特質を最大限活用して作成されている。読者は本年表をデザイン史年表として活用することもできるし、また、ファッション史年表として活用することもできる。しかし、更に一歩すすめて、この100年のデザインとファッションの動向を、

同時代的現象としてファッション・デザイン史年表として活用できるよう配慮されている。

II

10年ほど前まで、デザイン史とファッション史は、別個のものとして扱われてきた。これを産業流通システムの違いに帰す向きもあるようであるが、いわゆるデザイン分野における個々の生産流通の違いもそれぞれに異なったものであり、ファッション部門だけを切り離して扱う理由にはなり得ない。

デザイン史がファッション史を包括してこなかった(あるいは包括できなかった)理由の一つに、両者の史的アプローチの違いがあると思われる。

すなわち、デザイン史がデザイン運動史として、時代精神にかかわる倫理の体系として語られてきたのに対し、ファッション史は、フェミニズムを根底に持ちながら「解放」の歴史として論じられてきたという経緯がある。

前者が、「合理性」「合目的性」「機能性」といった言葉に置き換えられる倫理性あるいは禁欲性というものを根底に、モダニズムを表象してきたのに対し、後者はコルセットからの解放にはじまり、女性の自立や社会進出の問題を絡めながら、ニュールックやミニスカートやユニセックスへと転じていく。そこに通底するものはフェミニズム中心の考え方であると言って良いであろう。

ところが、ポストモダニズムをめぐる論争の前後から、デザイン史・ファッション史両者ともに従来の一元的な歴史観を超えた多元論的な視点からの歴史の見直しが始まった。

デザイン史の分野に即して言えば「モダニズムを超

えて」とか「近代の超克」という言葉に見られるように、哲学や社会科学の分野と連動して、徹底したモダニズム検証が行われた。この動きの中で、従来の史観から捨象されていたデザイン運動に光が当てられることとなり、新しい資料が発掘された。それらの多くは、ファッションの試みを内包しており、デザイン史を語る時、ファッションの問題を避けては通れなくなったのである。具体的には、革命期ソ連におけるロシア構成主義におけるコスチュームの問題、20世紀初頭のウィーン工房における服飾部門の役割（ちなみにポール・ポワレはウィーン工房を訪ね、そのシステムを学んでいる）、また、ドイツ工作連盟（D. W. B.）におけるコスチュームをめぐる論争、バウハウスにおける舞台衣裳の試み、更に遡ればイギリスの改良服運動や、唯美主義と服飾を結びつけたゴドウィンの存在等、枚挙に暇がない。地域的には、戦後のアメリカの動向や、北欧のヴォッコ、マリメッコといったデザイナー集団の台頭など、デザイン史はファッション史を包含するものとなってきたのである。

これに対し、ファッション史の側にも大きな変化が見られる。従来ファッションの歴史は、パリ・モードの歴史として語られてきた。その限りにおいてはファッション史は1本の数直線上で語ることが可能であった。ただこの方法は、ファッション史を他の造形分野から独立した閉鎖系の中に閉じ込めてしまう危険性を持っていた。事実そうだった。

これに対し15年程前からファッション史の見直しの気運が高まってきた。その先鞭をつけたのが、T. Lewenhaupt 著の『Crosscurrents, Art, Fashion, Design, 1890-1989』である。いみじくもcrosscurrents（交差する流れ）と題された同書は、アートとファッションとデザインが交差しながら、また、逆流しながら相互に影響しあって一つの流れを形成していることを指摘する画期的な書物であった。

ほぼ同時期にメトロポリタン美術館衣装部門から R. Martin 著『Fashion and Surrealism』（1987）が刊行され、ファッションと現代美術やデザインとの関係が考察された。R. Martin はその後『Infra Apparel』（1998）でファッションの構造的把握を論じ、次いで『Cubism and Fashion』（1998）で、造形の視覚革命とファッションの関係に光を当てた。これらはすべてファッションと他の造形ジャンルとの＜関係性＞を主題としたもので、従来のスタイリングやシルエットの変遷をもって語られてきたファッション史の通説を覆すものだった。

メトロポリタン美術館衣装部門のファッション史見

直しの試みは1973年の「The 10's the 20's, the 30's: Inventive Clothes, 1909-1939」展に遡ることができる。日本で「現代衣服の源流」展として紹介された同展は、ファッションにおけるモダニズムの確立を明確にしたものとして記憶されるべきである。

こうして、従来のデザイン史の枠組みが拡大するにつれ、また、ファッション史の枠組みが広がりをもつにつれ、両者はオーバーラップすることとなった。

日本デザイン学会でも2年程前、ようやくファッション史部会を立ちあげた。遅きに失した感はあるが、わが国においてもようやく本格的なファッション史とデザイン史の統合が研究課題として浮上してきている。

また、常見美紀子著『ファッション・デザイン史』（2000）（注：『ファッションデザイン史』ではない）の刊行は、この分野における先駆的な試みとして特筆してよい。

III

本年表は、杉野学園衣裳博物館のホームページ制作を機に作成されたものである。教育機関の附属施設のホームページにどのような教育的内容を盛り込むかが、わたしたちの課題であった。ホームページ上では、各図版はウィンドウとして開けることができ、更に詳しい解説を読むことができる。

教室で年表の見方を学び、ホームページのウィンドウを開けて更に詳しい内容を知り、博物館で実作にあたる。大学での講義と博物館での実習を連携させる媒体として機能するようにも作られている。

年表を含む博物館ホームページは、フランス語版も制作し、ヨーロッパに独自のキー局を設けて全欧州に鮮明な画像を発信している。アントワープ王立芸術アカデミーや英国キングストン大学大学院でも、この年表が活用されているとのことである。日本のファッション系の大学においても、プリントアウトして利用されている。（<http://www.costumemuseum.jp>）

本年表が新しいファッション史理解の一助となれば幸いである。

さいごに、本年表を含む博物館ホームページのフランス語版制作にあたり、フランス語訳を担当していただいたフィリップ・ベルテ（Philippe Berthet）氏に心より感謝申し上げたい。ベルテ氏は、日本語のニュアンスをよく理解し、それを適切なフランス語に翻訳してくださった。氏のエスプリは、私たちの要望をはるかに越えるものであった。

